

# 市指定史跡岩槻城大構確認調査 埋蔵文化財確認調査

2018

さいたま市教育委員会

## さいたま市ホームページ「岩槻城跡を探る」への報告書PDF版掲載にあたって

本書は、『さいたま市埋蔵文化財調査報告書 第13集』として、市指定史跡岩槻城大構確認調査の調査報告と、3地点の埋蔵文化財確認調査報告を収録して刊行されました。ここでは、市指定史跡岩槻城大構確認調査報告のみを掲載します。目次と末尾の報告書抄録には埋蔵文化財確認調査報告の記載がありますが、このPDF版では省略してありますので、御了解ください。

# 例 言

- 1 本書は、埼玉県さいたま市に所在する埋蔵文化財に関わる各種の調査等について報告する『さいたま市埋蔵文化財調査報告書』の第13集である。
- 2 本書は、岩槻城大構確認調査報告（第1部）、埋蔵文化財確認調査報告（第2部）の構成とした。
- 3 第1部には、平成27年度に実施した岩槻区にある愛宕神社内における岩槻城大構の確認調査の調査報告を収録した。この調査は、当該地において発生したフェンス設置工事に先立って遺跡の保存状態を確認するために実施された。調査は以下の通りに実施した。

## 岩槻城大構確認調査

- 1) 調査を実施した遺跡の名称及び所在地

名 称 岩槻城大構

所在地 さいたま市岩槻区本町3丁目

- 2) 調査期間

平成27年6月8日～平成27年6月23日

- 3) 調査の主体者・担当者は以下の通りである。

現地調査 主体者 さいたま市教育委員会  
教育長 稲葉 康久

担当者 関根 俊雄（生涯学習部  
文化財保護課埋蔵文化財  
係主査、当時）

整理・報告書刊行 主体者 さいたま市教育委員会

教育長 細田 眞由美

担当者 関根 俊雄（生涯学習部文化財保護課  
埋蔵文化財係長）

- 4) 調査に関する届出・通知は以下のとおりである。

(1) 史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請

平成27年5月20日付、教生文第480号

(2) 上記申請に対する許可通知

平成27年5月26日付、教生文第555号

(3) 現状変更終了届

平成27年10月2日付、教生文第2122号

- 4 第2部には、埋蔵文化財確認調査として実施した中で平成27年度に実施した柵谷遺跡、平成28年度に実施した小深作遺跡、平成29年度に実施した飯塚原地遺跡の確認調査状況及び出土遺物を収録した。

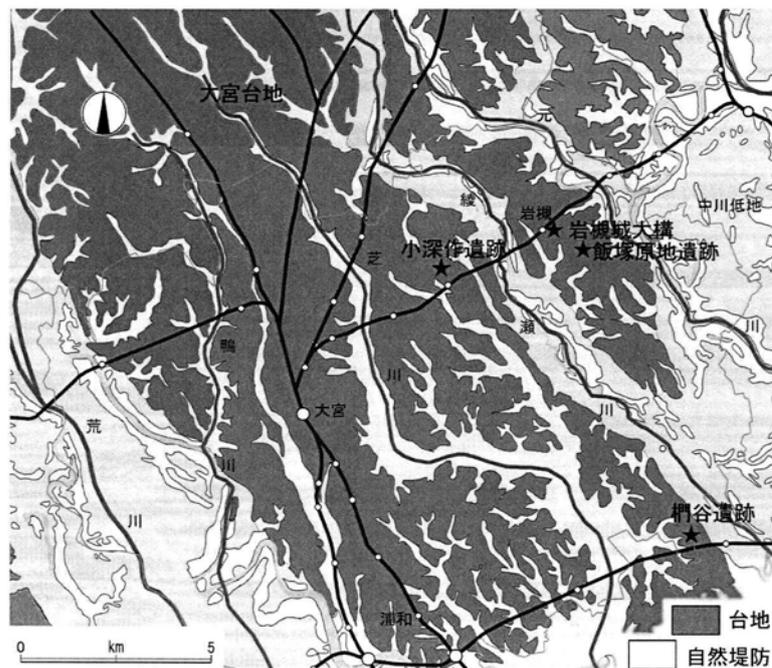
- 5 本書の制作は、さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係が担当し、次の通りに執筆・編集を分担した。

執筆 第1部：関根俊雄、元林恵子（Ⅱ章3節瓦）

第2部：永瀬史人、吉岡卓真、鈴木久雄

編集 鈴木久雄、吉岡卓真

- 6 本書に収録した調査に係る出土遺物、調査写真・記録等は、さいたま市教育委員会が保管している。



第1図 収録遺跡の位置

# 目次

例言

目次／表目次／挿図目次／図版目次

第1部 岩槻城大構確認調査	1
第I章 調査の契機と経過	1
第1節 調査の契機	1
第2節 発掘調査の方法と経過	2
第II章 遺跡の概要	3
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2節 調査区の概要	4
第III章 遺構と遺物	5
第1節 遺構	5
第2節 遺物	6
第3節 まとめ	20

第2部 埋蔵文化財確認調査	21
第I章 櫛谷遺跡確認調査出土遺物	21
第1節 調査の契機	21
第2節 遺構・遺物	22
第II章 小深作遺跡確認調査出土遺物	27
第1節 調査の概要	27
第2節 調査結果の概要	27
第3節 出土遺物	28
第III章 飯塚原地遺跡確認調査出土遺物	30
第1節 調査の概要	30
第2節 調査結果の概要	30
第3節 出土遺物	31

図版  
報告書抄録

## 挿図目次

## 図版目次

### 岩槻城大構確認調査

第1図 収録遺跡の位置	i
第2図 遺跡の位置	1
第3図 調査区の位置	3
第4図 全測図	4
第5図 第1号土塁	5
第6図 第2号土塁	6
第7図 トレンチ出土遺物(1)	7
第8図 トレンチ出土遺物(2)	8
第9図 瓦(1) 軒瓦	9
第10図 瓦(2) 丸瓦	11
第11図 瓦(3) 平瓦(1)	12
第12図 瓦(4) 平瓦(2)	13
第13図 瓦(5) 棧瓦(1)	14
第14図 瓦(6) 棧瓦(2)	15
第15図 瓦(7) 棟飾瓦	16
第16図 瓦(8) 道具瓦	17
第17図 瓦(9) 刻印一覧	18
第18図 瓦(10) 参考資料	19

### 埋蔵文化財確認調査

第19図 遺跡の位置と遺構・遺物出土状況	21
第20図 櫛谷遺跡竪穴住居跡出土埋甕	23
第21図 遺物包含層出土土器	25
第22図 遺跡の位置と遺構	27
第23図 小深作遺跡確認調査出土遺物	29
第24図 飯塚原地遺跡の位置及び調査の概要	30
第25図 飯塚原地遺跡確認調査出土遺物	31

### 岩槻城大構確認調査

図版1 (1)第1号土塁 (2)第2号土塁
図版2 (1)第7図1～28
図版3 (1)第8図29～40
図版4 (1)第9図1～12、第10図13・14
図版5 (1)第10図15～21、第11図22～24
図版6 (1)第11図25～29、第12図30～31
図版7 (1)第12図32～38
図版8 (1)第12図39～41、第13図42～45
図版9 (1)第13図46～49、第14図50
図版10 (1)第14図51～57、第15図58
図版11 (1)第15図59～61、第16図62～69
図版12 (1)刻印 (2)漆喰付着瓦・漆喰塊
図版13 (1)第20図1 (2)第20図2
図版14 (1)第21図1～28
図版15 (1)第23図1～31
図版16 (1)第25図1～20

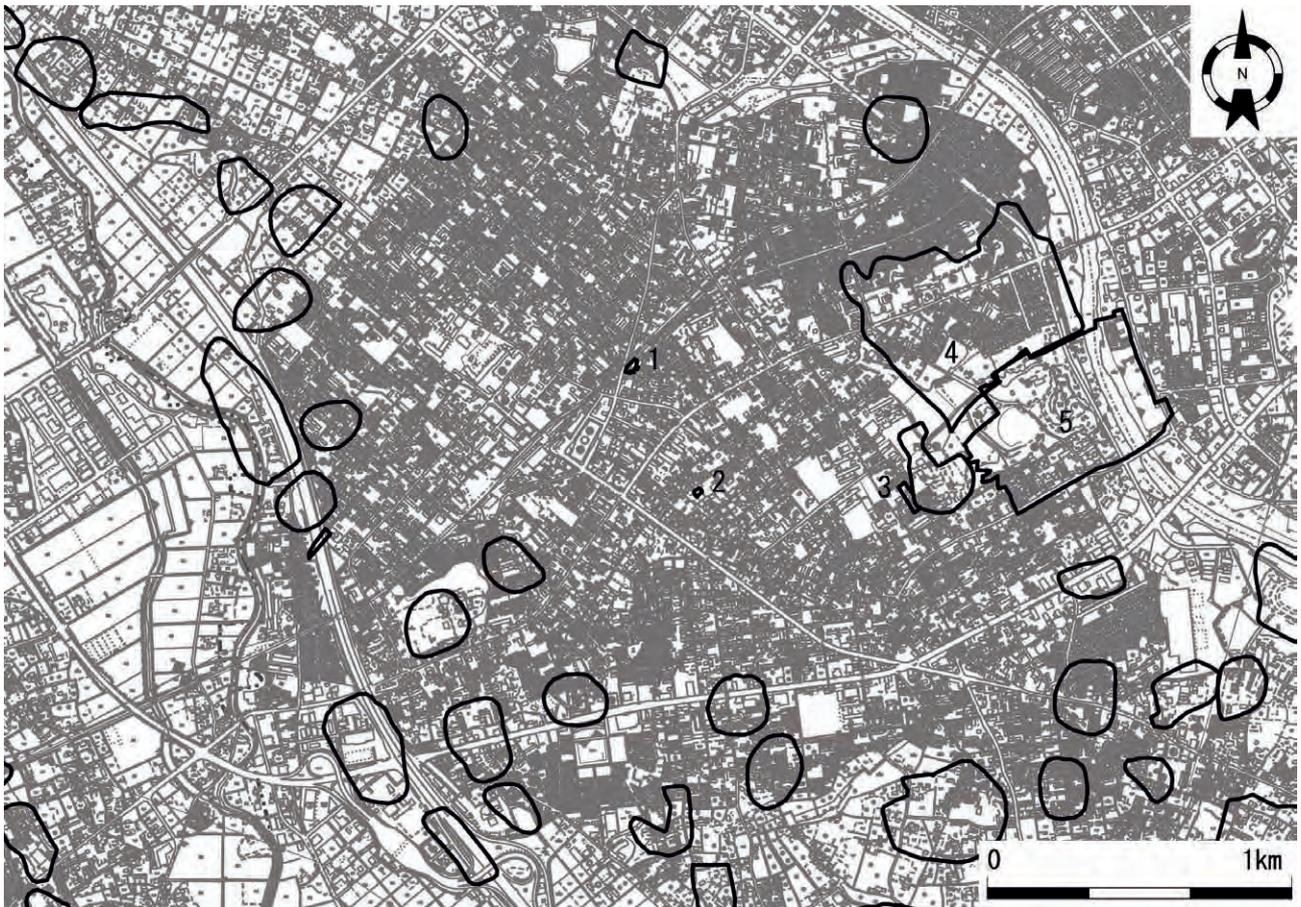
# 第 1 部

## 岩槻城大構確認調査

### 第 I 章 調査の契機と経過

#### 第 1 節 調査の契機

平成27年4月、さいたま市岩槻区本町三丁目におけるフェンス設置工事にあたり埋蔵文化財の所在について、工事主体者よりさいたま市教育委員会に照会があった。建設予定地はさいたま市指定史跡岩槻城大構の範囲内にあたるため、その取扱いについて協議を行った。その結果、工事に先立って遺跡の保存状態を確認するための試掘調査を実施することとなり、平成27年5月13日付けで、工事主体者よりさいたま市教育委員会教育長宛に確認調査依頼が提出された。当該地はさいたま市指定史跡内であるため、さいたま市教育委員会教育長が発掘調査のための現状変更許可申請書をさいたま市教育委員会教育長宛に提出し、5月26日付けで許可となった。これを受け、平成27年6月8日から23日にさいたま市教育委員会による試掘調査を行った。



1：岩槻城大構 2：岩槻城跡（新曲輪・鍛冶曲輪跡） 3：岩槻城跡 4：岩槻城大構跡 5：岩槻藩遷番館

第 2 図 遺跡の位置 (1/25000)

## 第2節 発掘調査の方法と経過

### 1 方法

今回の調査は神社境内地でのフェンス設置工事に先立ち、当該箇所における遺跡の保存状態を確認するために実施した。調査はフェンス設置予定箇所の愛宕神社の社殿南側に東西方向に2本のトレンチを設定して実施した。トレンチは植栽などにより作業スペースに制限があったため連続した1本のトレンチではなく東西で分断し、西をAトレンチ、東をBトレンチとした。調査はAトレンチから開始した。人力により表土を除去し遺構面である土塁の検出を行った。並行してBトレンチの表土除去を行い、土塁の上面を確認した。遺構確認後記録作業を実施し人力による埋め戻しを行った。調査終了後、現状変更の終了届を提出した。また、今回の試掘調査により遺構の所在が確認されたため、平成27年6月29日付けで今回の調査範囲を含む大構が所在すると想定される範囲を埋蔵文化財包蔵地として登録した。

### 2 経過

発掘調査は平成27年6月8日から平成27年6月23日まで実施した。6月8日、調査区の設定を行う。社殿南側のフェンス設置予定箇所に1m×9mの調査区を設定する。トレンチはAトレンチとし西からA1～A9とグリッドを設定し、遺物をグリッドごとに取り上げることとした。A1～A9グリッドの表土除去を開始し、地表面下5～10cmほどで砂利層が検出される。そのうちA4～A7グリッドでは砂利の堆積が厚くなることが確認された。6月10日、Aトレンチの調査を継続する。A1～A6グリッドで砂利層の掘削を行う。磁器・瓦破片が少量出土するが、ガラス・ビニールも混入する。砂利除去後、さらに下層の掘削を開始する。粘土と砂が混入する締りの強い暗褐色土である。6月11日、Aトレンチの調査を継続し、表土の掘削を行う。A5・A9グリッドで攪乱が確認されたため、その掘削を行う。攪乱の壁面を観察したところ、地表面より約50cmでローム盛土層を確認する。Aトレンチの南側に、新たにBトレンチを設定し調査を開始する。1m×7mのトレンチとし、グリッドを設定し西側よりB1～B7グリッドとした。6月12日、A1～A5グリッドの掘削を行う。攪乱の壁面で確認されたローム盛土より西側は急激に落ち込み、社殿の建物より西側は表土の堆積が厚くなる。Bトレンチは調査を継続し表土の掘削を行う。6月15日、A3～A5グリッドでローム盛土により構築された、土塁の西側斜面を確認する。Bトレンチで表土の掘削を継続する。表土上層の砂と砂利が混入する層の下層で黒褐色土層が検出されたので、その層まで表土を掘削することとする。黒褐色土層はB1～B3グリッドの範囲で確認された。6月16日、Aトレンチ西側で砂利下層の表土の掘削を継続する。土塁構築土であるローム盛土の続きを確認する。Aトレンチで調査区土層の分層を行った後、写真撮影を行う。Bトレンチで、表土上層の砂・砂利混じりの層の掘削を行った結果、トレンチ全体でローム盛土を検出する。B1～B2グリッド付近では南へ向かい傾斜し、B3～B7ではフラットであるが上層はあまり締りが無い。6月17日、Aトレンチの調査区の土層図を作成する。Bトレンチは調査を継続し、表土の掘削を行いローム盛土を確認する。盛土は傾斜しており南が高く北へ向かい低くなっている。6月18日、Aトレンチの平板図作成、Bトレンチの写真撮影を行う。6月22日、Bトレンチの平面図、土層図を作成する。A・Bトレンチ内のレベルを計測し、トレンチ位置図を作成する。6月23日、人力により調査区の埋戻しを行い現地での作業を終了する。

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

岩槻城大構はさいたま市の東部、東武野田線岩槻駅から東約1.5kmの岩槻区本町三丁目地内に所在する。現在周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲は東西約38m、南北約39mである。

遺跡は大宮台地の東縁部にあたる岩槻支台上に占地している。岩槻支台は南流する綾瀬川により、大宮台地主台との間を画され、北西から東側を流れる元荒川によって慈恩寺支台との間を画されている。台地上は概ね西から東へ緩やかな傾斜を帯び、さらに沖積地から伸びる開析谷が樹枝状に発達している。岩槻城の主郭部は台地東縁部の舌状台地上に占地しており、今回の調査された大構は主郭部の西方に位置している。

岩槻城大構は岩槻城と城下町の周囲を取り囲む土塁と堀の総称である。大構は天正年間に豊臣秀吉の関東侵攻に備えて築造されたと考えられており、土塁と堀が総延長約8kmにわたり城下町を取り囲んでいたといわれている。現在は大構の土塁はそのほとんどが現存しておらず、今回の調査地点にあたる愛宕神社境内に残る大構は貴重な遺構としてさいたま市の指定史跡となっている。岩槻城の主郭部では各種開発に伴う発掘調査が行われているが、平成14年には諏訪小路武家地内の大構跡において発掘調査が実施されている。土塁は基底部のみが残るだけであったが、調査結果により同地点での土塁基底部幅は7.7m、土塁構築面から堀底までは深さは4.1mと確認された。また、堀底では堀障子1基が検出されて



第3図 調査区の位置 (1/2500)

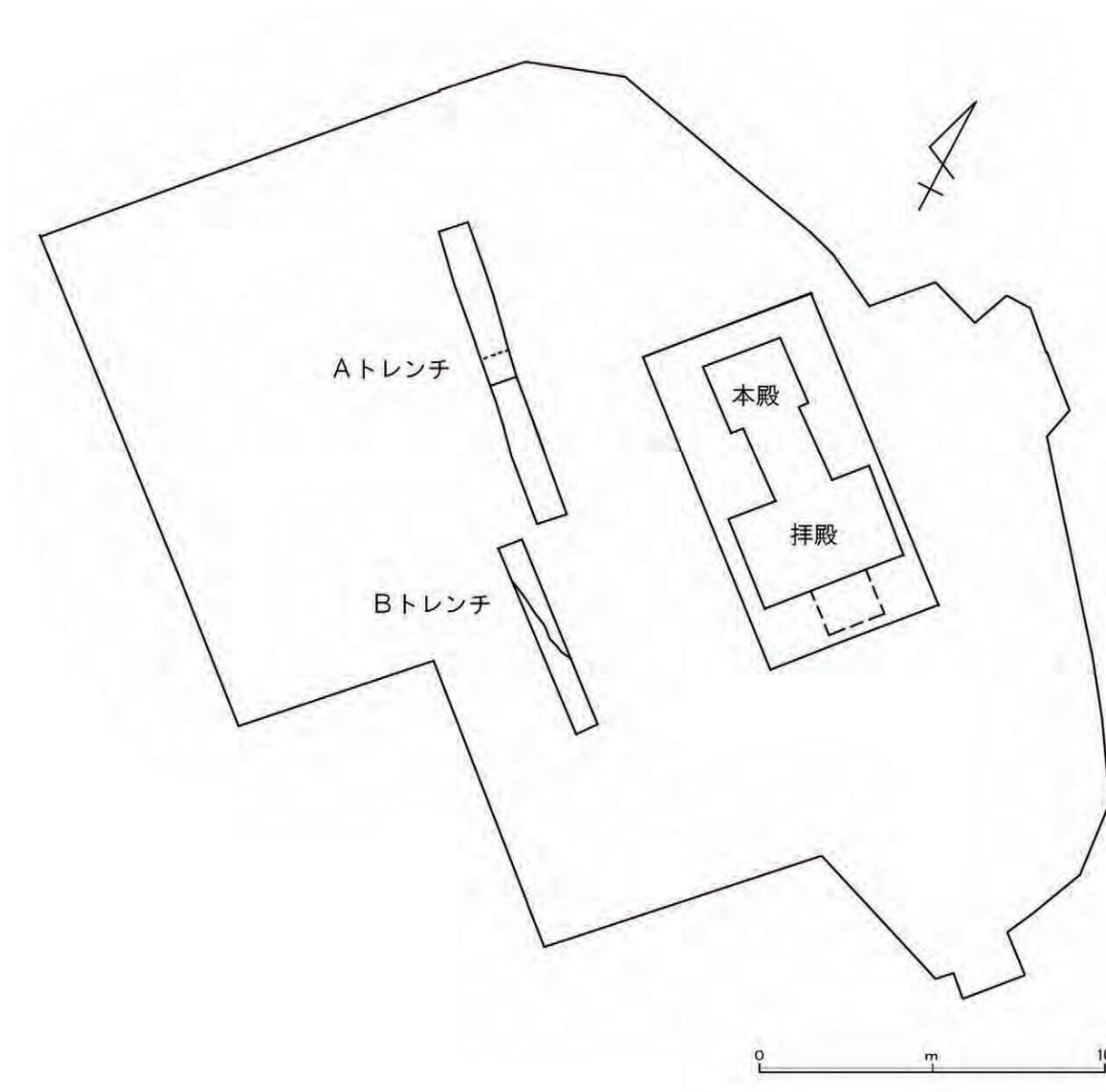
## 岩槻城大構

いる。

今回調査された大構は史跡指定当時の資料によると規模は高さ5間（9.0m）、底辺7間（12.0m）となっている。また、昭和47年には西・北・東部がセメントにより補強され、現在みられる景観となっている。

### 第2節 調査区の概要

今回の調査範囲は、工事予定範囲に設定したトレンチ状の調査区16㎡である。調査の目的が史跡の保存状況を確認することだったため、遺構確認面は土塁構築時の盛土までとした。検出された盛土は土塁本体であるため史跡の保存のため掘削は行わなかった。遺物は表土中より近世の陶磁器・瓦などが180入り平箱3箱分出土した。



第4図 全測図

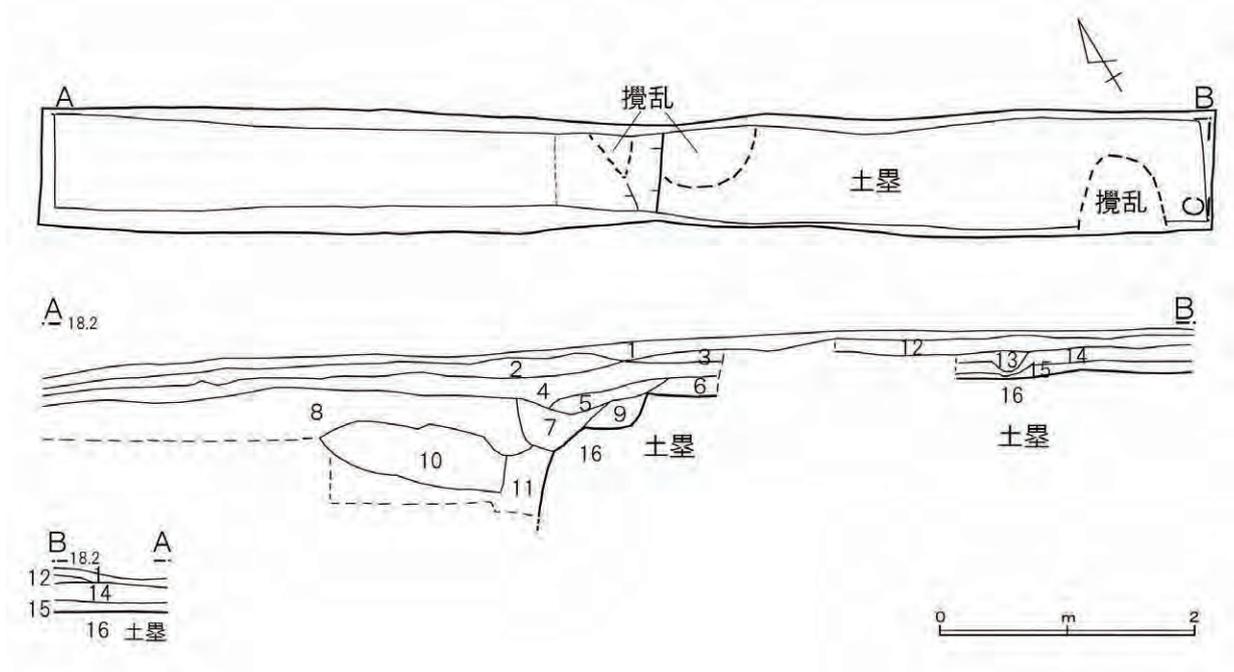
### 第三章 遺構と遺物

#### 第1節 遺構

##### 1 土塁

##### 第1号土塁 (第5図)

Aトレンチ中央から東寄りで検出された。調査区東端から4.36mまで土塁上の平場で、そこから西へ向かって傾斜している。土塁上場の東端は一部攪乱を受ける。検出範囲で確認したところ、土塁の延伸方向は西側の道路と並行してほぼ南北方向であったものと思われる。検出された土塁は黄褐色土でローム土によって築造されたものと考えられる。土塁壁面は一部風化により脆い箇所もあったが、全体的には締りが良く残存状態は良好であった。



##### A トレンチ

- 1 黒色土 粒子粗い。締りややあり。
- 2 暗褐色土 砂利主体。締り強い。
- 3 暗褐色土 ローム粒少し混入。締り強い。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多く含む。締り強い。
- 5 暗褐色土 やや粗い粒子。ロームブロック少し混入。締りあり。
- 6 黄褐色土 粗い粒子。ローム粒子含む。締りややあり。  
(土塁の風化面)
- 7 暗褐色土 粗い粒子。砂・砂利少し含む。締りあり。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・灰色粘土ブロック含む。締り強い。

- 9 黄褐色土 6と似る。6より締りあり。
- 10 砂・砂利
- 11 暗褐色土 ロームブロック混入。締り強い。
- 12 暗褐色土 ロームブロック・砂混入。締り強い。
- 13 暗褐色土 ブロック状の砂を多く含む。締り強い。
- 14 暗褐色土 13と似る。13よりロームブロック・砂少ない。締り強い。
- 15 暗褐色土 ロームブロック含む。締り強い。
- 16 黄褐色土 ローム主体。締りあり。(土塁)

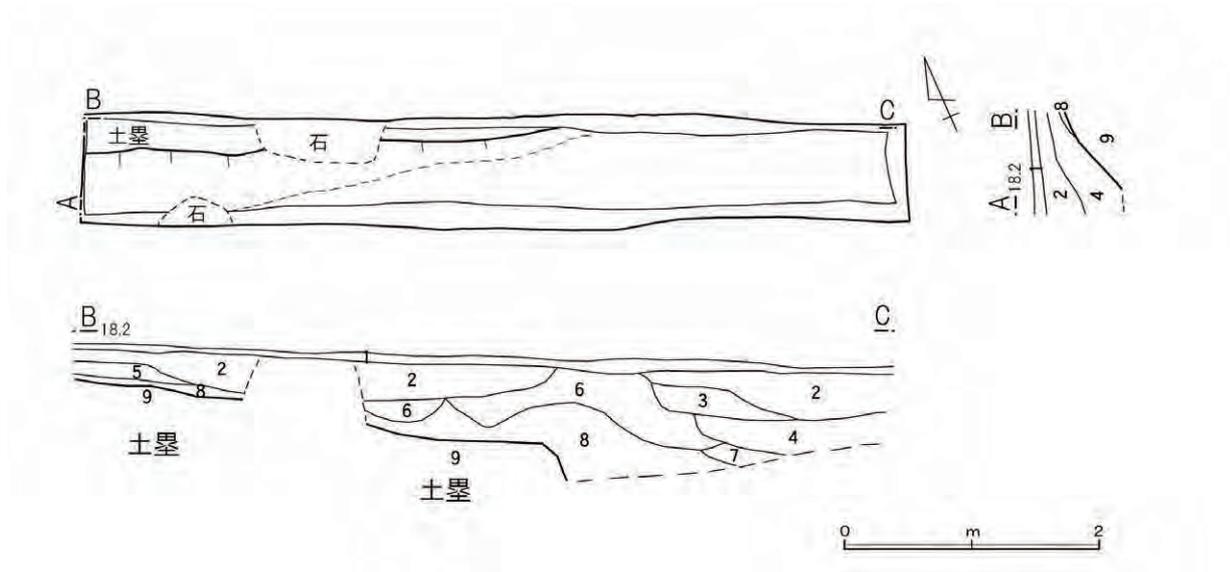
第5図 第1号土塁

##### 第2号土塁 (第6図)

Bトレンチの中央から北西で検出された。調査区西端から4m13cmの範囲で、土塁上場の平坦面が確

## 岩槻城大構

認められた。平坦面は西側は広く東へ向かい幅が狭くなる。第1号土塁は南北方向に延伸していたが、2号土塁は東西方向へ延伸していることが確認された。平坦面から南東へ向かい急激に落ち込んでいる。壁面は第1号土塁と同様に締まりがよく残存状態は良好であった。



### Bトレンチ

- |                                |                               |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒色土 粒子粗い。締りややあり。(表土)         | 6 暗褐色土 粗い粒子。ローム粒・砂利少し混入。締りあり。 |
| 2 黄褐色土 砂・砂利主体。締り強い。            | 7 黄褐色土 砂・砂利主体。締り強い。           |
| 3 暗褐色土 粗い粒子。砂利少し混入。締りあり。       | 8 黄褐色土 粗い粒子。ロームブロック混入。締りややあり。 |
| 4 暗褐色土 ローム粒少し混入。締りあり。          | 9 黄褐色土 ローム主体。締り強い。(土塁)        |
| 5 暗褐色土 砂利主体。締り強い。(Aトレンチ2層と似る。) |                               |

第6図 第2号土塁

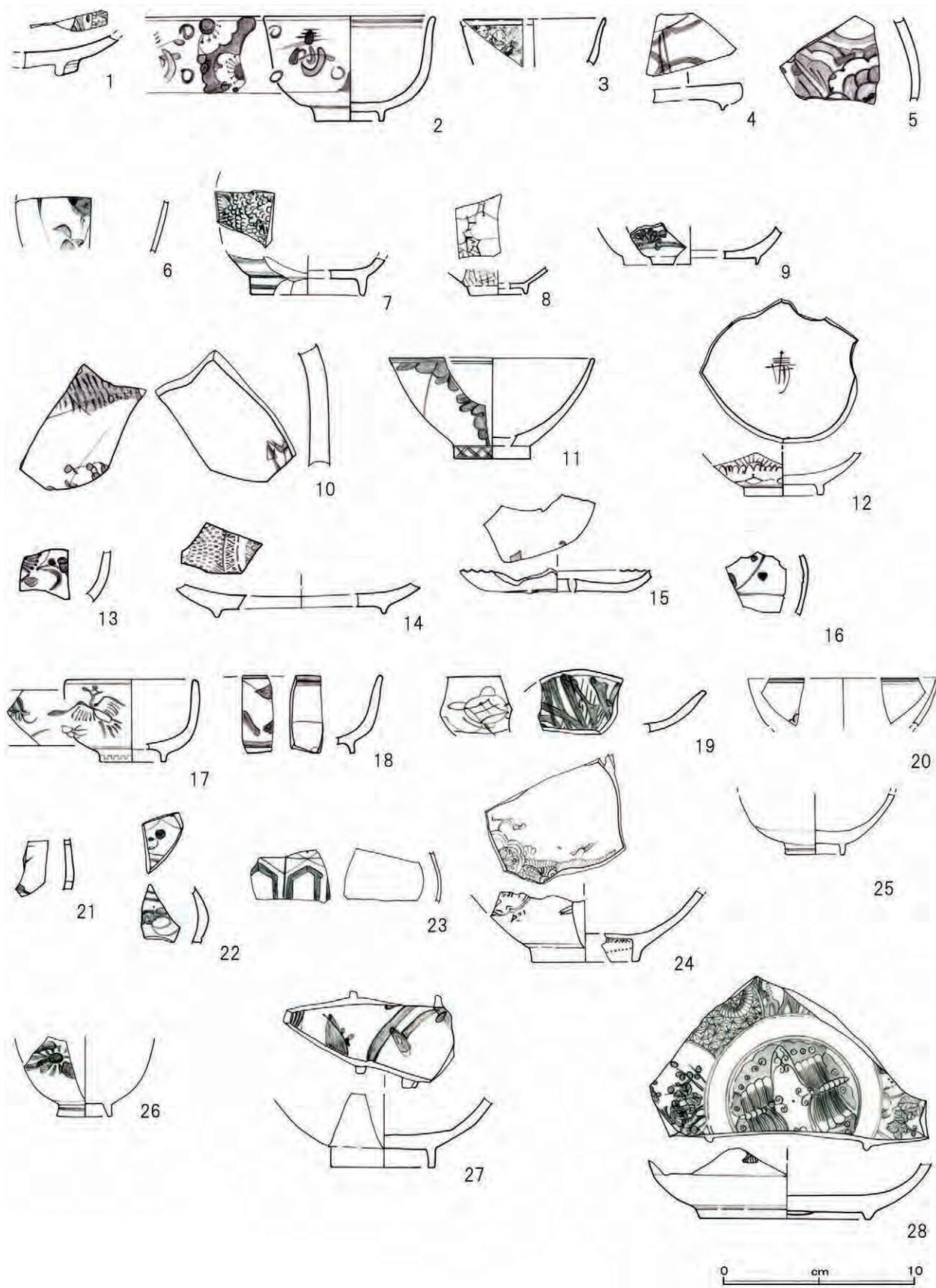
## 第2節 遺物

### 1 Aトレンチ出土遺物 (第7図)

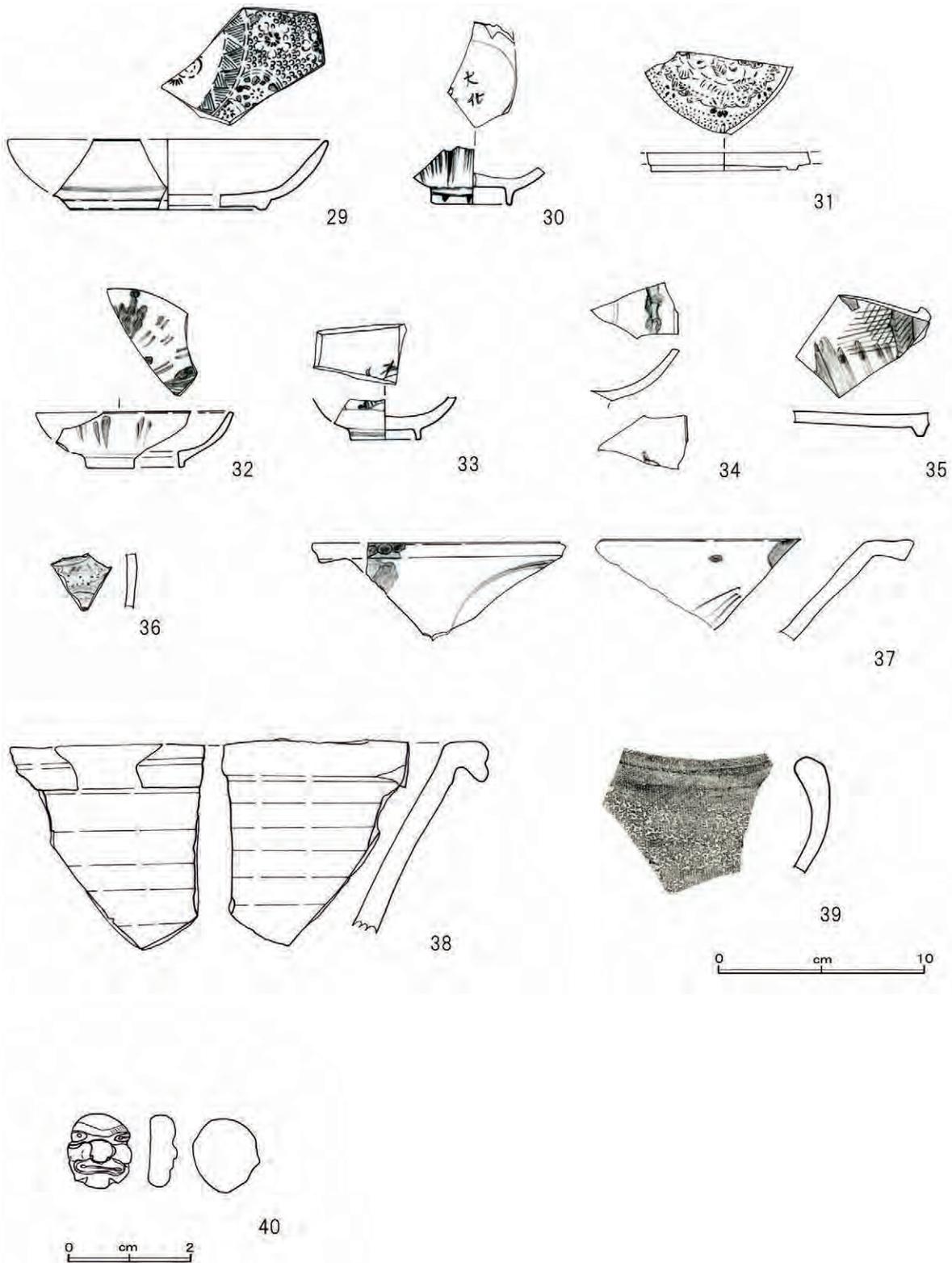
第7図1はA 2グリッド表土中より出土した染付皿の底部破片である。内面染付、高台外面に二重圏線、見込みに圏線が見られる。

### 1 Bトレンチ出土遺物 (第7図)

第7図2～4はB 3グリッド表土中より出土した。2は瀬戸の染付碗で外面に「寿」と花文が描かれる。残存率は1/2である。3は染付碗の口縁部破片である。外面染付で人物が描かれる。4は染付皿の底部破片である。内面染付で、高台を欠く。5～10はB 4グリッド表土中より出土した。5は染付瓶の肩部破片である。外面に草花文が描かれる。6は染付碗の胴部破片で外面染付である。7・8は肥前の染付皿でいずれも底部破片である。9は染付皿の底部破片で外面染付である。10は鉢の胴部破片である。11～16はB 5グリッド表土中より出土した。11は染付碗で外面染付、残存率は1/4である。12は染付碗の底部破片で見込みに「寿」、外面は染付である。13は染付碗の胴部破片である。外面に草花文が描かれる。14・15は染付皿で14は底部破片、内面染付、外面に圏線が見られる。15は口縁から底部にかけて



第7図 トレンチ出土遺物 (1)



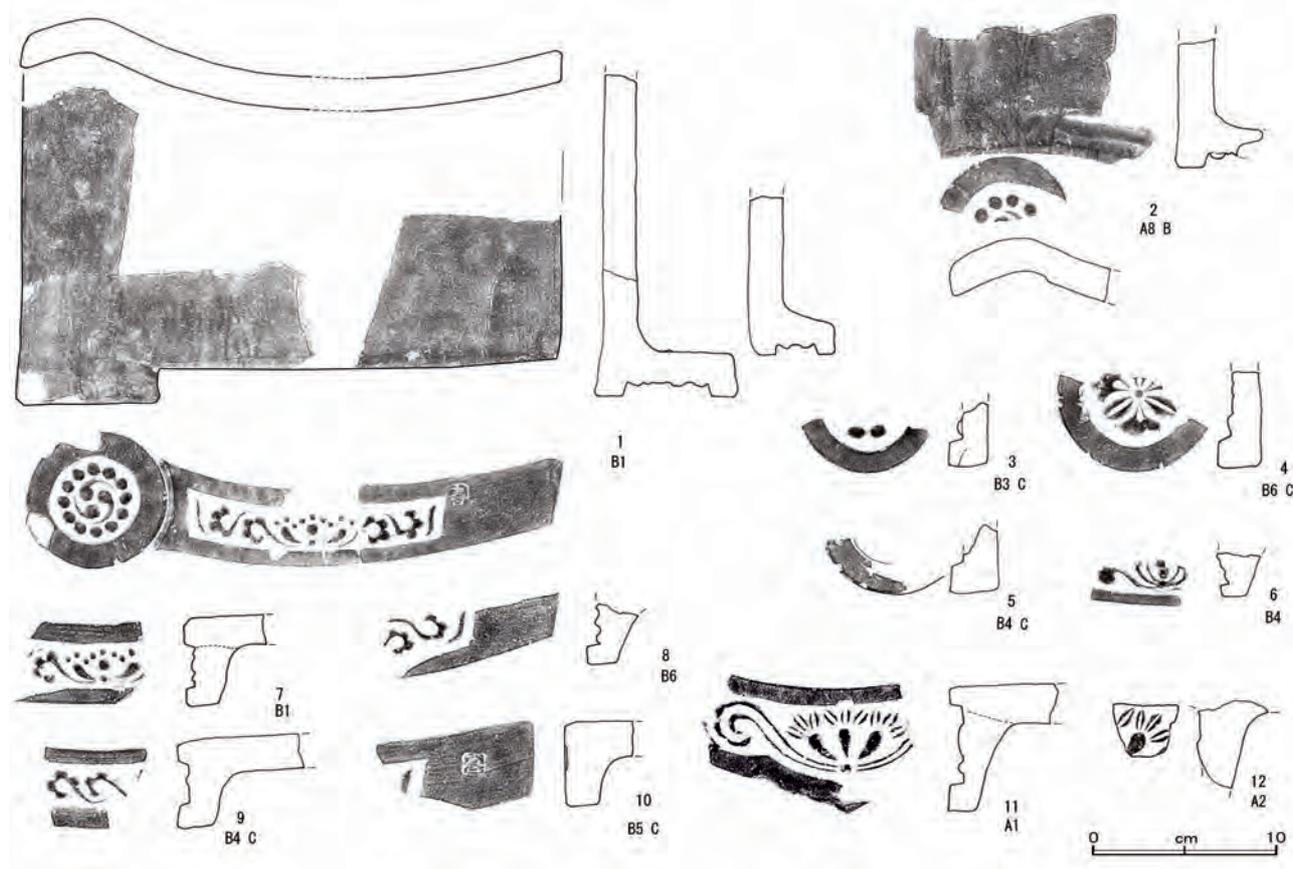
第8図 トレンチ出土遺物（2）

の破片である。内外面とも染付である。16は陶器で胴部破片である。瓶と思われる。17～36はB 6 グリッド表土中より出土した。17は染付碗で外面に鳥、口縁内部に二重圏線が描かれる。残存率は1/4である。18は染付碗の破片で外面染付、内面に圏線が見られる。19は染付皿の破片で、内外面とも染付である。20は染付碗の口縁部破片、21は口縁部から底部の破片である。ともに外面は染付、内面に圏線が見

られる。22・23は染付碗の胴部破片である。24～27は染付碗の底部破片である。24は白玉による焼継があり、内面染付は龍と思われる。25・27は高台に砂目、26は外面に花文、27は内面染付である。28は染付皿で、内面見込みに蝶、その外周に草花文が描かれ、外面底部に二重圏線が見られる。29は染付皿の口縁部から底部の破片である。内面は草花文、外面に二重圏線、高台内は無釉である。30・31は染付皿の底部破片である。30は見込みに「大化」、外面は染付、31は内面に草花文が描かれる。32は染付皿の口縁部から底部破片である。内外面とも染付である。33～36は染付皿の底部破片である。33は内外面染付、34は高台を欠く、35・36は内面染付である。37・38は陶器甕の口縁部破片である。口縁が外反する。39は陶器甕の口縁部破片で無釉である。40は泥面子である。

### 3. 瓦 (第9～18図)

瓦は破片数で485片出土した。大構を覆う50～80cm厚さの表土層出土で遺構との関係は捉えられないが、近年近世瓦の研究が進められており、資料を提示するものである。大構外側のA区で157片、大構内側のB区で315片、表採13片である。出土遺物の半分以上を占める。その内69点を示した。出土瓦の種類は、平瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦、棟瓦、棟飾瓦、熨斗瓦、伏間瓦等がみられるが主体は平瓦・棧瓦の破片で、原形を確認できるものはなかった。表面の色調は暗灰色～暗青灰色を呈すが黒色や一部銀化した瓦も認められる。内部は灰～暗灰色を呈す。胎土はやや砂質で黒灰～黒褐色粒が混入するほか、胎土・調整の異なる瓦が僅かに混在している。道具瓦等に加工・転用された(凹面に櫛目状工具痕が付く)破片、漆喰が付着した破片も多くみられた。また被熱し褐色～橙色を呈する丸瓦、平・棧瓦片が散見する。大正12年関東大震災を機に広く普及した掛棧瓦片がB-1区でまとまって出土している。遺物番号



第9図 瓦(1) 軒瓦

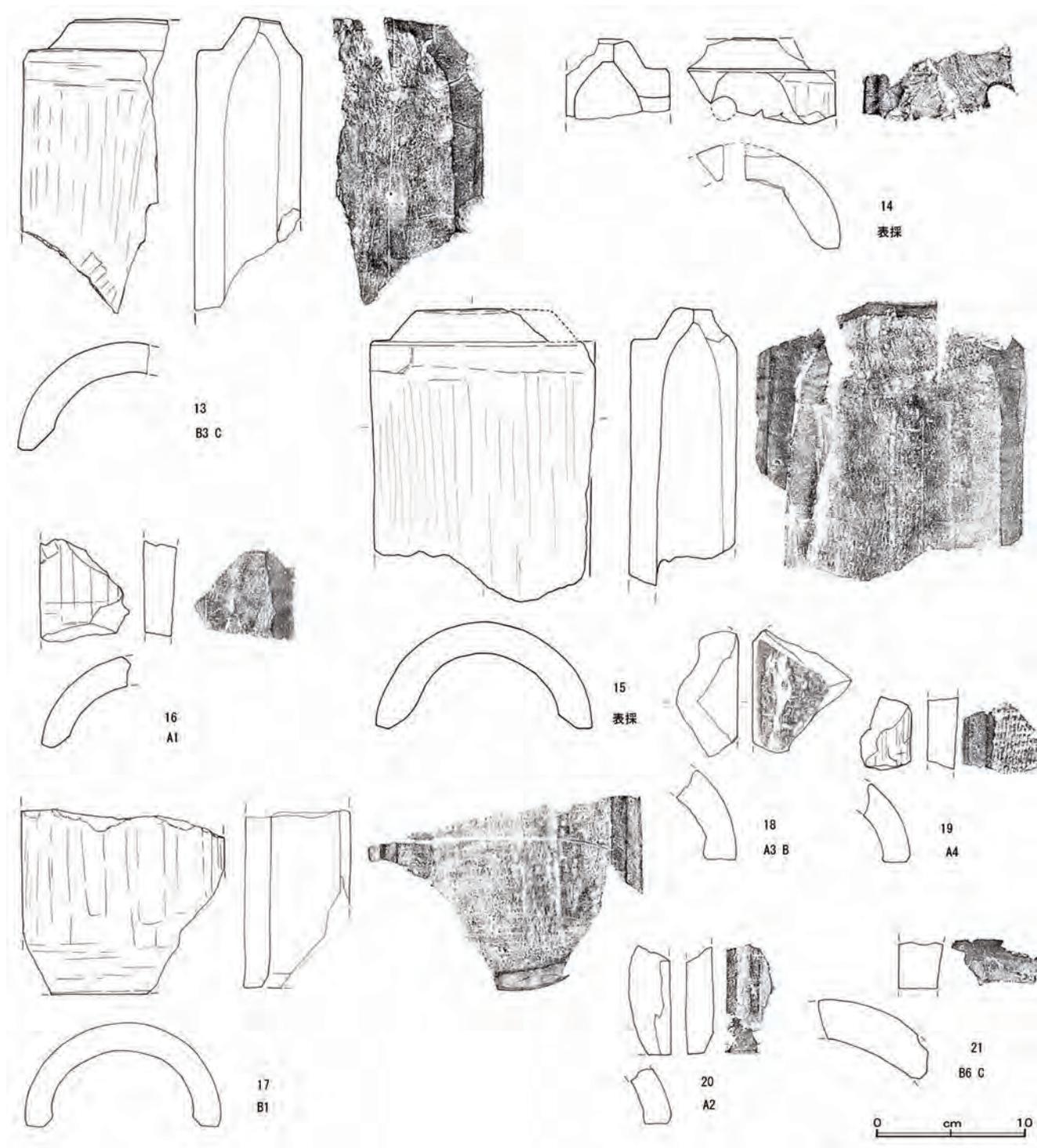
## 岩槻城大構

の下に出土位置を記した。数字の後のb・cは中層・下層を意味する。巴文は尾から頭の方で右巻・左巻、計測部名称は加藤・金子文献（1990）に依る。

1～12は軒棧瓦である。1は全幅29.8cm、厚さ1.8cm。丸部瓦当径7.6cm・文様区径4.8cm、平部瓦当厚4.8cm・文様区幅13.8cm・周縁高0.6cm、棧幅4.1cm。色調は表面は黒灰色で内部は灰色を呈す。丸部瓦当は12連珠左三つ巴文、平部瓦当は樹枝及び珠文からなる中心飾り、くびれを有する唐草上下2反転、脇に子葉がつく均整唐草文である。「東海式」の文様に似るが、中心飾り中央は大小の連珠が縦列する。上面周囲粗く面取りされる。刻印は右周縁文様区際施される。隅丸方形枠内に「喜」。2～5は丸部である。2は連珠右三つ巴文で珠文が4つ残る。厚さ1.8cm、棧幅4.7cm。3は連珠のみ残る。厚さ2.1cm。4は三つ葉藤様の文様である。離材キラコが多く付着しやや銀化する。厚さ2.4cm、復元瓦当径8.6cm。5は下部小片。瓦当は剥離し周縁のみ残る。復元瓦当径7.7cm、厚さ2.7cm、周縁幅1.4cm。色調は灰色でキラコが表面に付着する。6～12は平部である。6は顎部で花様の中心飾り、下向き唐草が残る。所謂「江戸式」文様である。文様区の平坦面に范の木目が残る。焼成良好で堅緻である。7は1と同文、厚さ1.6cm、瓦当厚4.9cm、顎下部厚1.8cm。8は唐草と子葉が残る。顎下部厚1.6cm。9は唐草が2つとも下向きで唐草上下2反転に先行する先行する文様である。銀化する。厚さ1.9cm、瓦当厚4.7cm。10は子葉のみが残る。脇区右の中央に刻印が捺される。隅丸方形枠内に「喜」。キラコ付着。11は滴水瓦である。文様は紡錘型の珠文と逆滴状3枝の中心飾り・唐草からなり、珠文と唐草が重線である。厚さ1.9cm、瓦当厚4.6cm。12は11と同類。1・7を除いて瓦当に離材キラコが付着する。

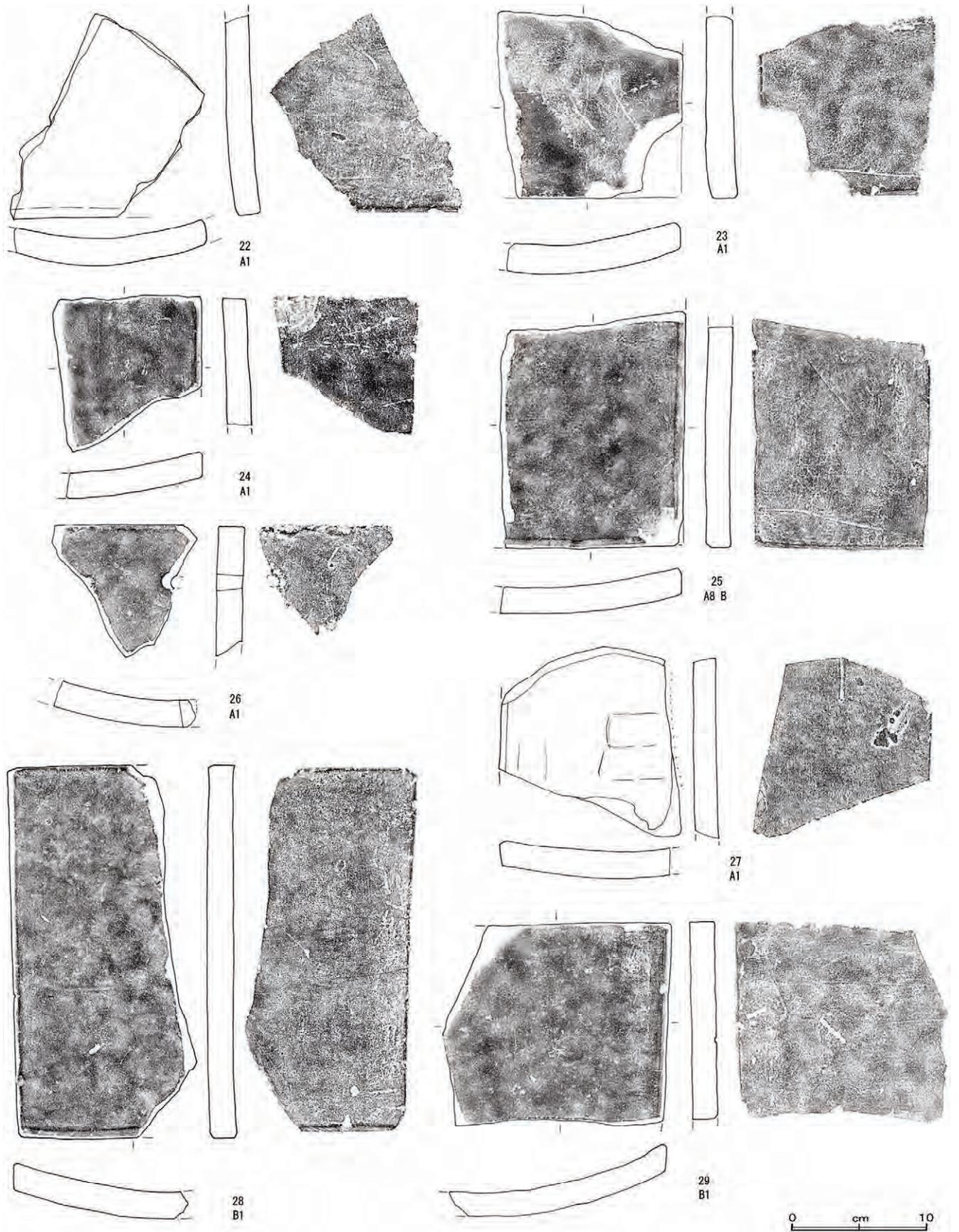
13～21は丸瓦である。13は凸面縦方向ナデ調整・狭端縁のみ横ナデ、凹面に布目痕、コビキB痕が明瞭に残る。厚さ1.9cm、高さ7.8cm、玉縁長2.1cm。14は厚さ2.5cm、玉縁幅2.1cm、孔径1.6cm。15は凸面縦方向ナデ調整・狭端縁のみ横ナデ、凹面に布袋痕、棒状痕が残る。全幅14.8cm、高さ7.3cm、玉縁長2.1cm、玉縁幅11.5cm。16は広端縁付近の側縁小片で凸面ナデ調整、凹面に布目痕がつく。厚さ2.1cm。17は凸面ナデ調整・広端縁のみ横ナデ、凹面に布目痕、コビキB痕が明瞭に残る。広端、側縁内側の面取りが狭い。厚さ1.8cm、高さ6.8cm、全幅13.5cm、玉縁長2.1cm。18は広端縁片。凹面側縁内側の面取りがなく切り放ち形である。凹面に紐痕あり。厚さ2.1cm。19は側縁小片。凹面布目痕が明瞭。側縁は切り放ち形。厚さ1.8cm。20は広端縁片。凹面に棒状痕が残る。広端部の面取りは1.7cmと狭い。側縁は切り放ち形である。厚さ1.9cm。21は狭端縁付近の小片。灰色で砂質。凸面はナデ、凹面に布目痕残る。厚さ2.4cm。13～16は18世紀代、17～20は19世紀代の様相を呈すか。

22～40は平瓦と捉えた。いずれも加工・再利用されたとみられる。挿図中の「……………」は凹面上端の櫛目状工具痕を指す。22～27・41はA区出土、28～40はB区出土である。22は凹面は横ナデ・キラコ仕上げ、凸面にコビキB痕残る。頭部以外の三面は櫛目状工具痕残る。厚さ1.9cm。23は凸面に離れ砂痕。厚さ2.1cm。24は左側破断面に櫛目状工具痕。厚さ1.8cm。25は頭部右側。凹面横ナデ・端部面取り、凸面コビキ痕B・ナデ調整。左側破断面に櫛目状工具痕。厚さ1.9cm。26は尻部。凹面はキラコ仕上げ、凸面は木口ナデ痕がつく。径1.1cmの焼成前穿孔あり。厚さ1.9cm。27は凹面横ナデ・キラコ仕上げ、凸面はコビキB痕・木口ナデ痕あり。厚さ1.9cm。28は頭部上側2段ナデ、下側ナデ切。色調は灰白色・内部が灰色の胎芯状。胎土は粘土質である。全長27.2cm（≒9寸規格）。厚さ1.9cm。29も胎土は胎芯状である。厚さ1.8～1.9cm。30は尻部左側片。色調は褐灰色。凹面横ナデ・キラコ少し付着、凸面はコビキ痕B・砂目痕あり。下側と右側の破断面に櫛目状工具痕。厚さ2.0～2.1cm。31は尻部左側片。凹面横ナデ・面取り、凸面ナデ調整あり。下側と右側の破断面に厚さ1.9cm。32は灰色で砂質、凹面に横ナデ。

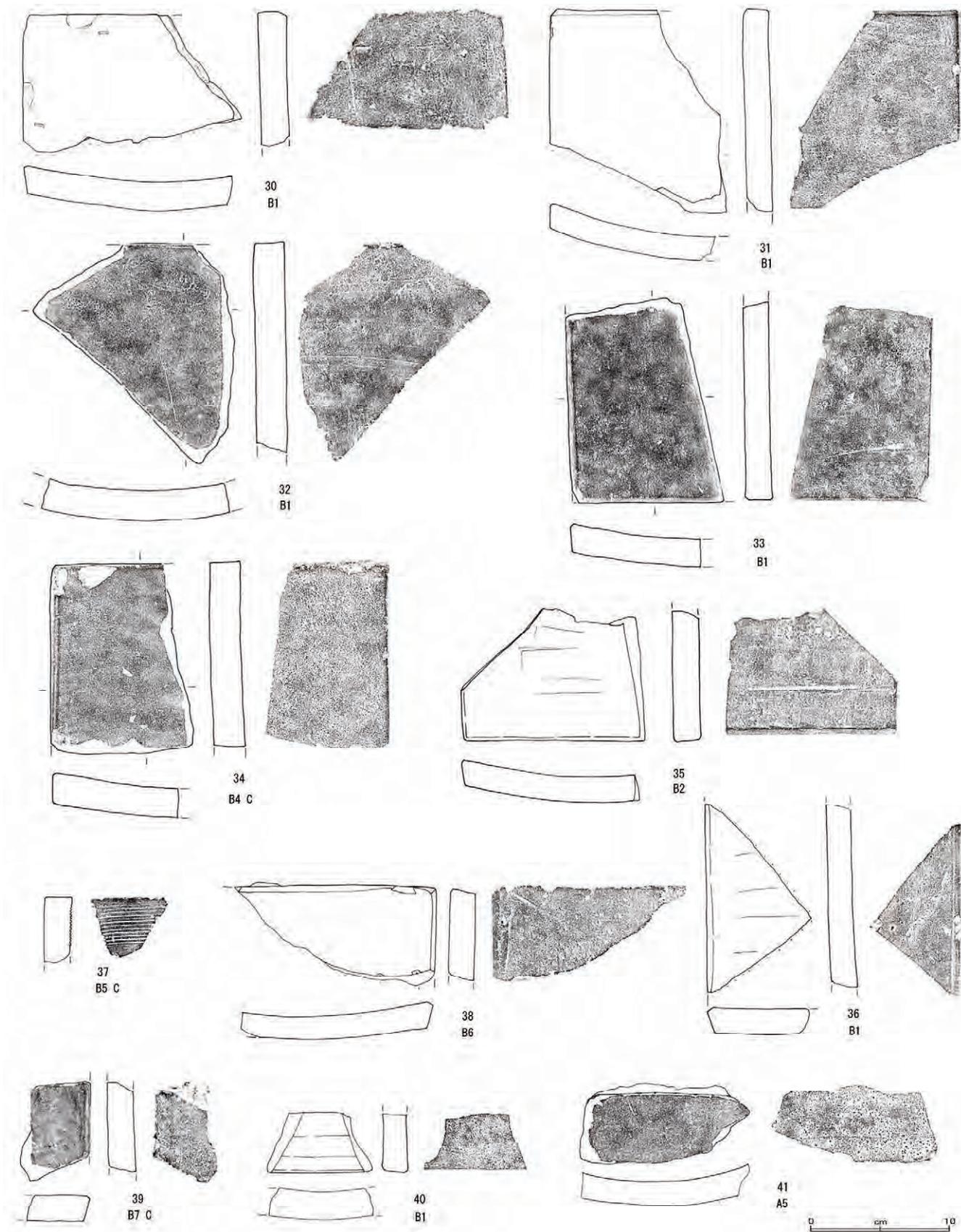


第10図 瓦（2） 丸瓦

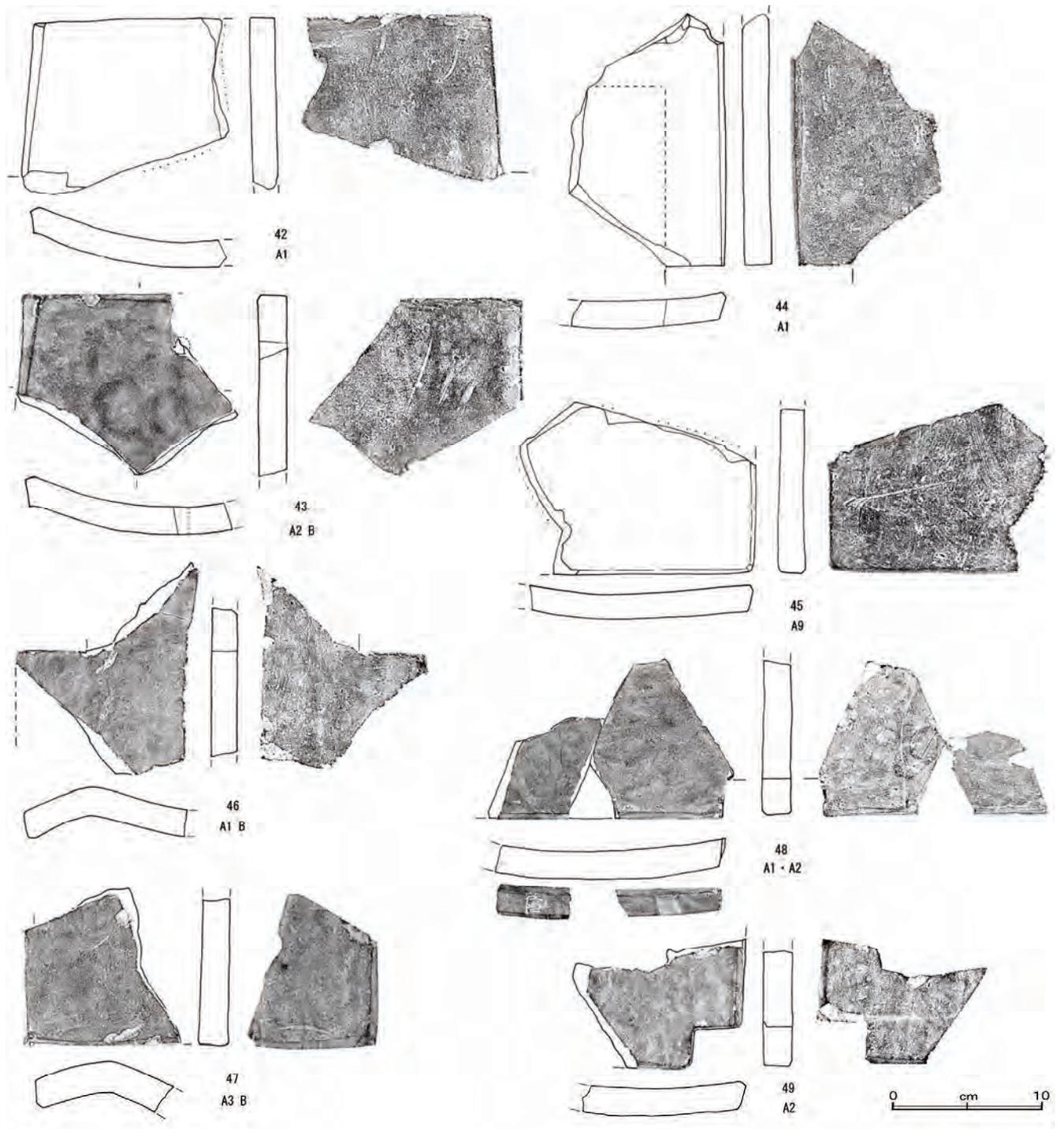
凸面に離砂付着、横ナデ調整。厚さ2.3cm。34は砂質で青黒灰色。凹面キラコ付着、凹面砂目痕。右側破断面に櫛目状工具痕。厚さ2.2cm。36は灰色で砂質。側縁部を櫛状工具で角状に加工されている。凹面はナデ、凸面には砂目痕がつく。37は尻部片で凸面に櫛目状痕がつく。38は尻部右隅片。破断面は擦られ、面戸瓦に再利用されたと思われる。39は岩槻城跡出土瓦中にみられる軟質（粘土質で焼成が甘い）瓦と同類である。40の凹面は黒灰色でキラコが付着する。凸面に離れ砂が付着する。厚さ2.0cm。41の



第11図 瓦 (3) 平瓦 (1)



第12図 瓦(4) 平瓦(2)

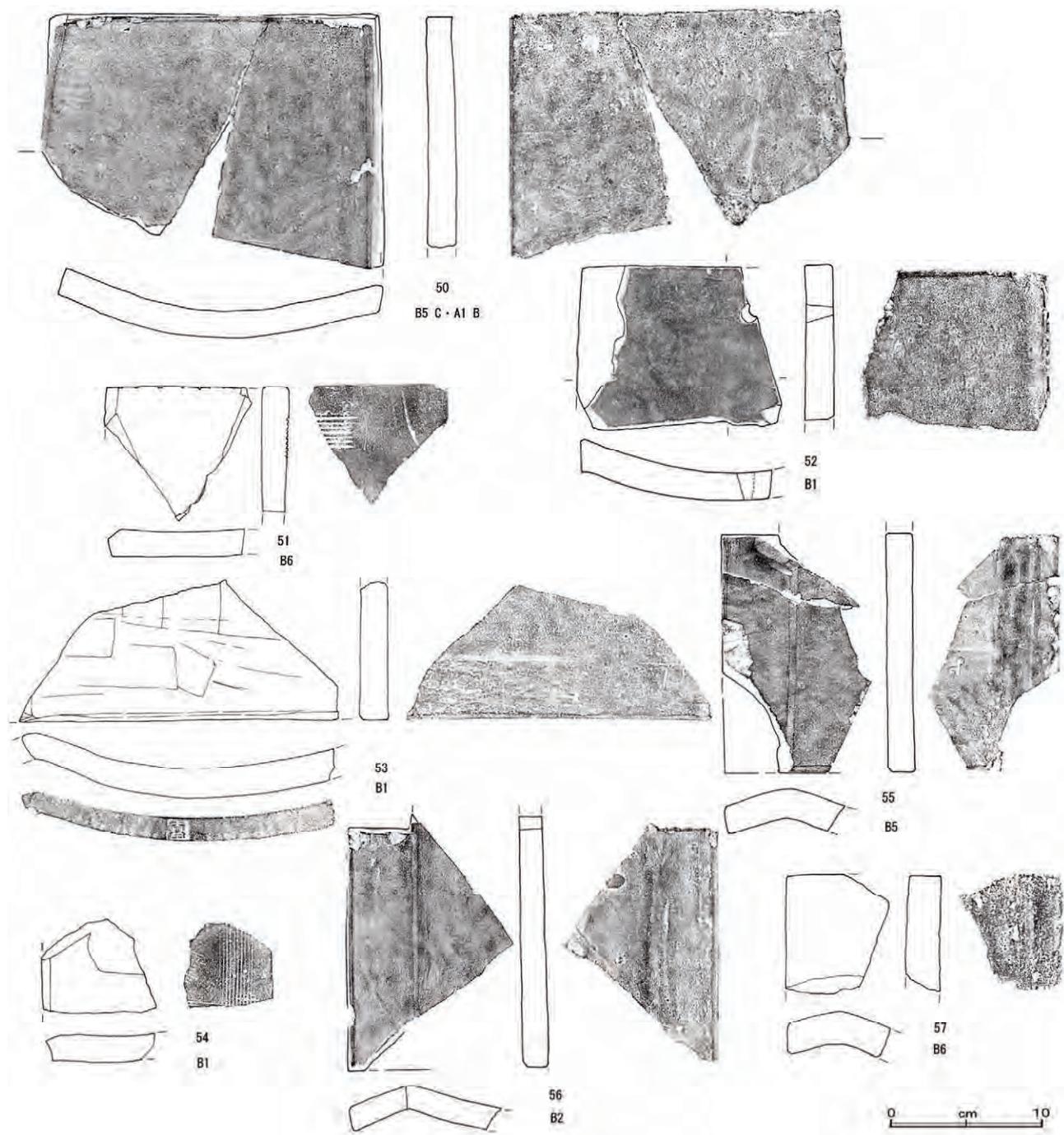


第13図 瓦 (5) 棧瓦 (1)

凹面は銀化しキラコが付着する。破断面に工具痕が明瞭に残る。凸面には離砂が付着しキラコもまばらにつく。厚さ1.8cm。

42～57は棧瓦である。42～49はA区出土、50～57はB区出土である。42は表面の色調青黒灰色で内部灰色、やや砂質の胎土に黒灰色粒を含む。凹面横ナデ、厚さ1.7cm、棧部切込長10.8cm。43は表面色調黒灰色で胎土灰色を呈す。凹面は横ナデ、凹面はコビキB痕・ヘラナデ・離砂付着。厚さ1.9～2.0cm。尻部に焼成前に穿孔された孔径1.2cmの釘穴1個が残る。44は凹面にキラコ付着。厚さ1.9cm、平部切込幅3.0cm。45は凸凹面にキラコ付着。凸面は糸挽き状の痕が付く。46は棧部。厚さ1.9cm、切込幅4.1cm、

遺存から切込長は6cm以上と推測できる。47は棧部で上面キラコ付着し銀化する。厚さ1.9cm、棧幅4.4cm。46・47は同系。48は平部。厚さ1.8cm、切込長2.7cm。頭部に刻印あり。方形枠内に「喜」。A1とA2で接合した。49は平部で厚さ1.8cm、切込幅2.7cm、切込長3.2cmを測る。右側斜破断面上側に櫛目状工具痕あり。50は色調青黒灰色で胎土灰色。凹面キラコ仕上げ、凸面離砂痕、厚さ1.8cm、尻部幅21.0cm、棧部切込長8.6cm。B5とA1で接合。51は棧部切込部片。砂質。凹面は銀化する。凸面は灰色。尻部面取り・8条1単位の櫛目痕がつく。厚さ1.7cm。52は50と同系。凹面に刷毛痕明瞭。尻部に焼成前に穿孔された孔径1.2cmの釘穴1個が残る。厚さ1.8cm。53は平部、頭部中央に刻印あり。方形枠内に「喜」。凹面横ナデ、黒色だがキラコ付着。凸面灰色ナデ痕。厚さ1.8~1.9cm。54は棧部切込部片。凹凸両面・側面共平滑な仕上げ。凹面に縦・横・斜めの櫛目残る。厚さ1.7cm。55は棧部で頭部が少し残る。棧部の

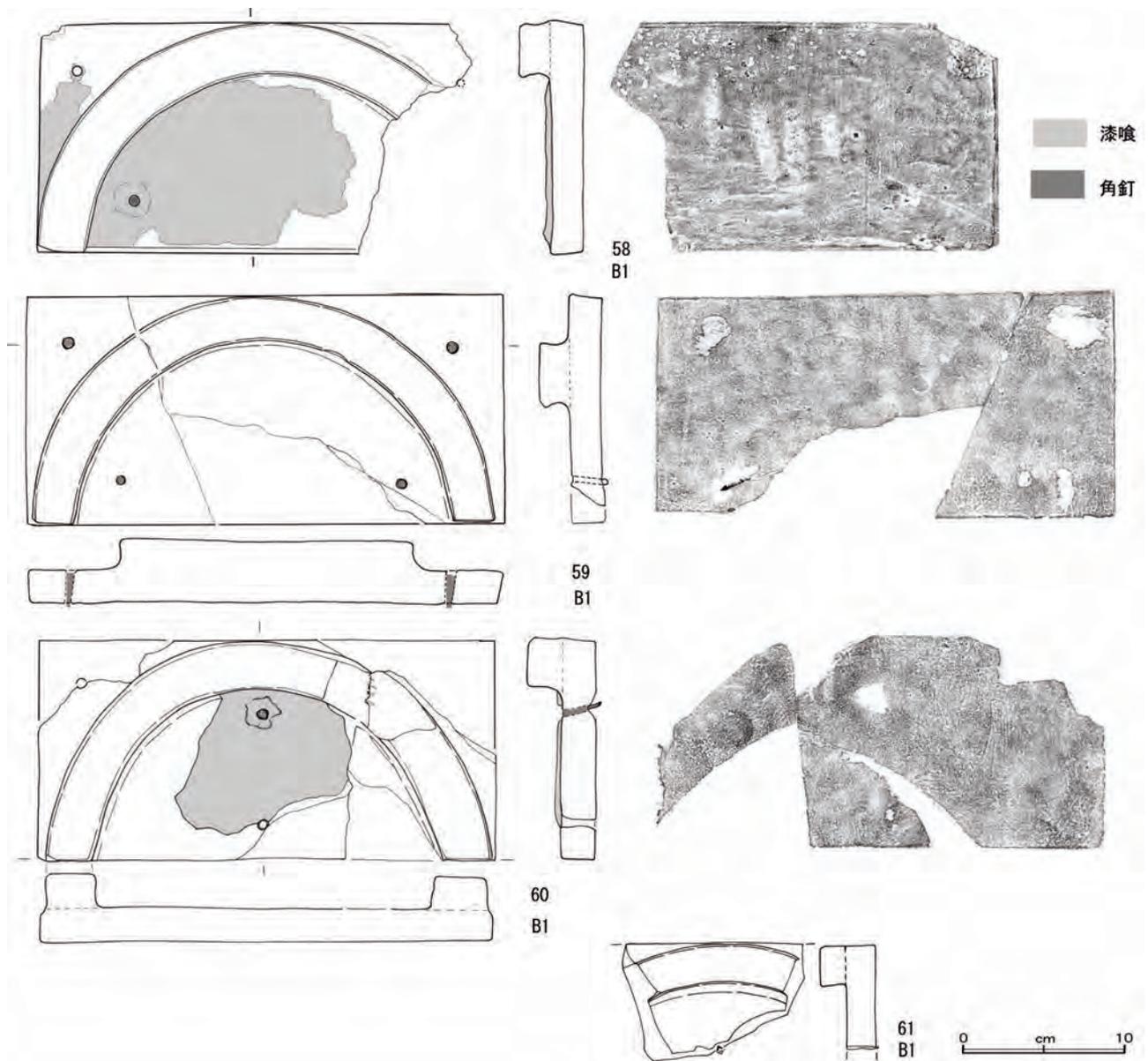


第14図 瓦(6) 棧瓦(2)

## 岩槻城大構

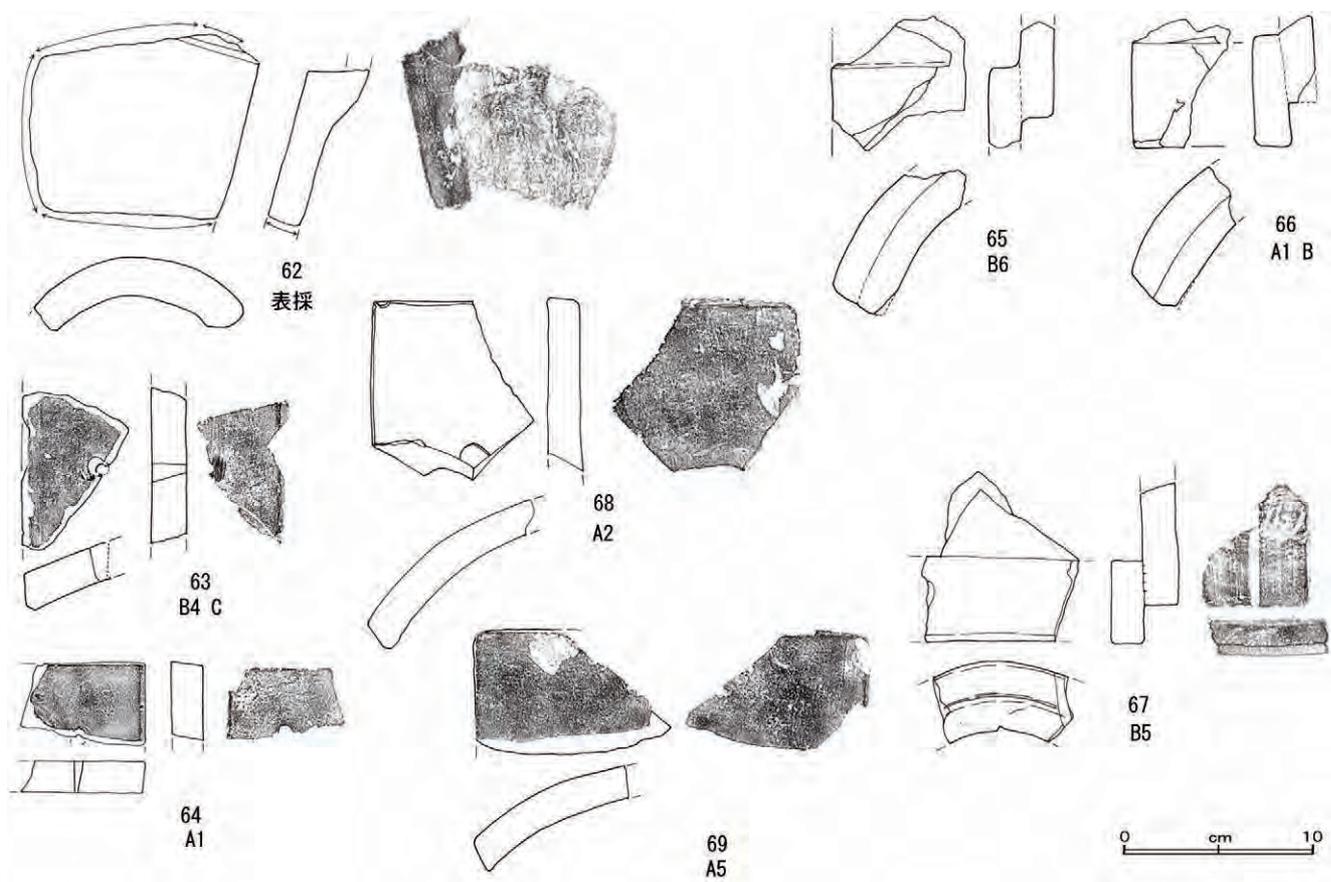
法量は厚さ1.8cm、長さ15.5cm、切込幅3.7cmである。56は棧部で頭部がわずかに残る。棧部の法量は厚さ1.7cm、切込幅が3.8cm、棧の長さ15.7cmを測る。57は棧部だが、輪違瓦様に加工されている。厚さ2.1cm、切込幅3.8cm。掲載外で棧部の破片が多く見られることから、棧部を破棄し平部は再利用されたと考えられる。

58～61は棟飾瓦である。幕末の瓦で組み合わせて青海波を構成する（金子智氏のご教示による）。縦13.5～14.5cm×横28.0～29.0cm×厚さ1.9cmの粘土板の上に幅3.3cm、厚さ1.9cmの半弧状の粘土を孤を上にして貼り付けている。破断面から、接着のためにつけられた2.5cm幅で5条の櫛目が観取できた。焼成前に穿たれた孔径0.5～0.6cmの釘穴が4ヶ所あり、中に頭部0.3cm角の角釘が遺る。孔の位置は孤の外側上部左右に各1ヶ所あり、それらと孤の内側下位に横列して2ヶ所（58・59）或いは孤の内側中央に縦列して2ヶ所（60）の何れかをセットにした2パターンある。表面には4～5ミリ厚さで漆喰が塗られ、釘穴も覆われる。58～60は同系で半円の外径は27cmである。58の背面には制作時の指痕が残る。62はやや小ぶりで、厚さ3.5cm、粘土幅は2.5cm、推定外径は24cmである。



第15図 瓦（7）棟飾瓦

62～69は道具瓦類である。62は丸瓦の上部を加工して輪違瓦に転用される。63は熨斗瓦か。凸面に丁寧なナデ調整。左端に刷毛目が付く。凸面から焼成前に1.0cmの釘穴が穿たれる。凸面では径0.5cmである。厚さ1.9cm。64は隅が直角を成す小片である。表面はハケナデがありやや銀化している。上縁から3.4cm、右側縁から3.0cmの位置にところに焼成前に穿たれた径0.6cmの釘穴がある。丁寧なナデや孔の位置、反りのない平坦な形状から海鼠瓦と捉えた。厚さ1.6cm。65～69は伏間瓦片であろう。65は凸凹面共黒灰色を呈し銀化する。キラコが付着する。胎土は粘土質で灰白色、内部が灰色の胎芯状である。厚さは1.8cm。66は灰色で胎土はやや砂質。凸面は銀化しキラコが散見する。凹面は布目条痕が付く。厚さ1.8cm。67は褐灰色で胎土は粘土質。凸面はやや銀化する。凹面には布目痕と2本の細い棒状痕がつく。厚さ1.8cm。68・69は尻部片である。色調は黒灰色。胎土は灰色で胎土はやや砂質。凹面は横ナデの間からかすかに布目条痕がみられる。厚さ1.8cm。68の凸面は銀化する。



第16図 瓦 (8) 道具瓦

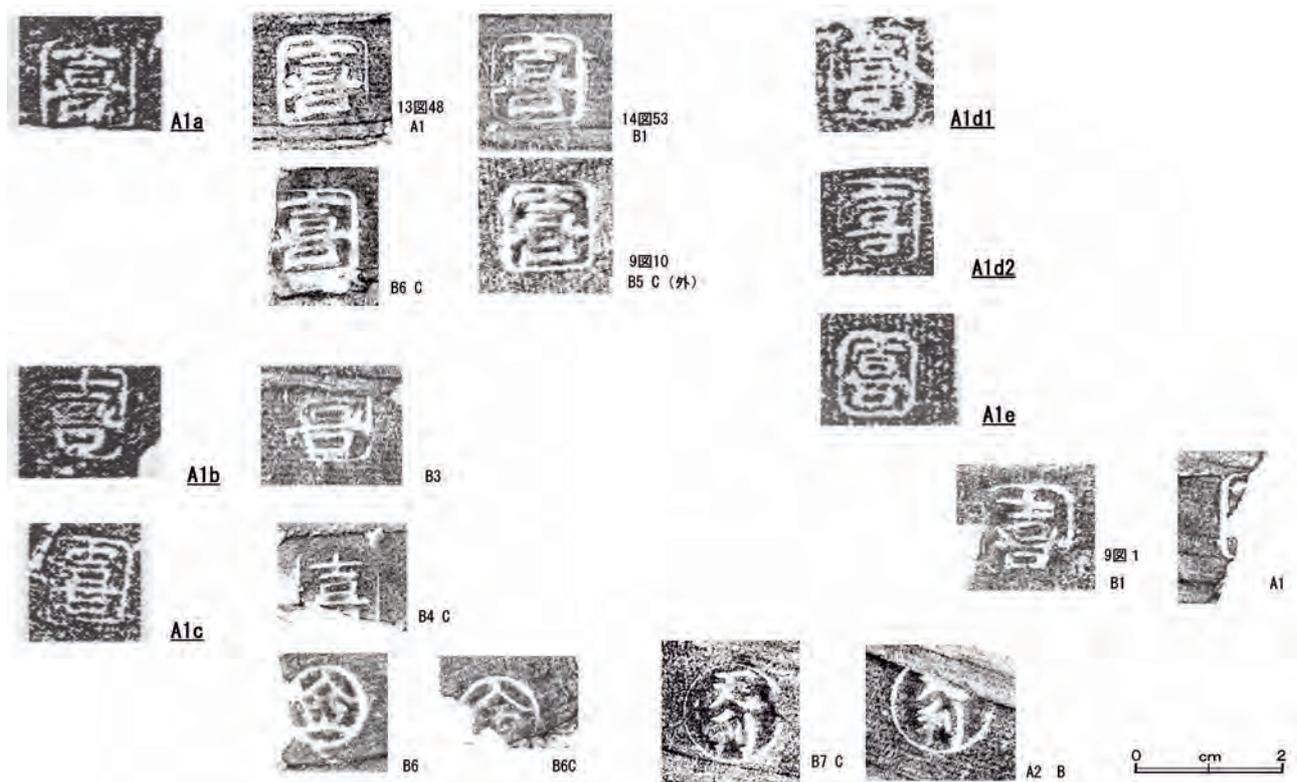
以上検出した瓦の厚さは概ね2.0～2.1cm、1.8～1.9cm、1.6cmの3種類である。整形はキラコ少々付着、離材キラコ使用、キラコ仕上げがみられた。瓦当文様は、丸部は連珠を伴う巴文、4は愛宕神社神紋や宮司家紋ではない。平部の文様は「江戸式」文様と「東海式」系の文様がある。また唐草の向きは中心からみて下・上と下・下の2種類みられた。製作時期や地域の異なる瓦が混在する様相が捉えられる。漆喰が厚く付着した破片を図版に掲載した。

## 岩槻城大構

### 刻印について

刻印は12片に確認された。掲載外8片の刻印の位置は平・棧瓦頭部である。大別すると、方形枠内に「喜」が7点、円内に「金」が2点、円内に縦書きで「天利」が2点、不明1点である。大きさは方形「喜」が縦1.2cm前後×横1.2～1.25cm前後、円に「金」が径1.1cm、円に「天利」が径1.4cmである。

2004年当時岩槻市内（現岩槻区内）採取・出土の刻印集成が報告されている（岩槻市2004）。そこでは刻印が文字か記号か、次に刻印の形状で分類され、4群・11種類を提示する。A群は方形で「喜」、「宗」、「平」、「定」か（ママ）、「天」か（ママ）、とある。B群は長方形で「上宮」右横書、「彦上」右横書、「定武」右横書、枠なしで「定武」右横書である。C群は円形で「大」、D群は円形に記号陽刻「+」あるいは「十」か（ママ）、円（○）のみ、である。今報告の円形に「金」、円形に「天利」（縦書）は新出で、この2例を加えると岩槻区内では4群・13種類となる。刻印A群1と分類される「喜」は更にa～eの5例に細分されている（17図A1a～A1e）。「喜」の分類を試みたところ、B6出土の1点がf（6例目）の可能性があると捉えられた。近年では三の丸武具蔵跡第5地点でも棧瓦頭部に「喜」が確認されている。岩槻区所在の明治前期に建てられたと推定される国の登録有形文化財「長谷川家住宅旧店蔵及び主屋」に葺かれている軒棧瓦瓦当や棧瓦頭部中にも刻印が認められる（方形に「喜」「宗」、円形に「作」）。また昨年の埋蔵文化財研究集会資料に各県の刻印資料がまとめられて



出土事例 **A1a**：岩槻城本丸跡（棧瓦頭部中央）、**A1b**：遷喬館三次（軒棧瓦瓦当・棧瓦頭部）、**A1c**：入山高地貝塚第2地点（軒棧瓦（滴水瓦）瓦当・棧瓦頭部中央）、**A1d1**：龍門寺山門礎石地業（棧瓦頭部）、**A1d2**：遷喬館二次（棧瓦頭部）・遷喬館三次（軒棧瓦瓦当・棧瓦頭部）、**A1e**：黒谷貝塚土坑（平瓦頭部・軒棧瓦瓦当）

第17図 瓦（9）刻印一覧

おり、「11. 埼玉県」では騎西城妙光寺出土の1点が報告されている。今回確認できた12点をあげて、今後の検討に備える。

### 出土瓦の背景

瓦が出土した大構の上には愛宕神社本殿・拝殿が座している。『新編武蔵風土記稿』卷之二百二埼玉郡之四岩槻領久保宿に「三光寺 天台宗、東叡山の末、愛宕山満蔵院と號す、本尊地藏、開山元立寛永年中起立とのみ傳へり、愛宕社、稻荷社、松尾社」とある。岩槻市史等には愛宕社は別当寺の三光寺境内に祀られていたこと、寛永年中（1624～1643：岩槻藩主阿部家の時代）に開山の三光寺は近世末期に無住となり、慈恩寺末寺の正福寺が留守居役をつとめていたこと、明治初期に廃寺となりその跡に愛宕社宮司家が居住・代々奉仕していることが記される。藩政史料には「城主屋形普請の地鎮祭で正福寺の伴僧三光寺」と貞享三（1686）年七月に記録が残る。9図11・12の滴水瓦は、平成元年に調査された入山高地貝塚第2地点建物地業層で同文様の瓦が出土している（18図）。岩槻区所在の慈恩寺観音堂（現本堂）は天保14年（1843）に再建後、大正12年の関東大震災で被災し、修理を終えたのは昭和4年とのこと。その折、無文の滴水瓦に葺き替えられており、入山高地出土資料は修理の時に処分された瓦の可能性が指摘されている（岩槻市2004）。岩槻城内では今のところ確認されておらず、慈恩寺との関わりが推測されよう。

現在本殿は瓦葺き、拝殿は銅葺きである。『神社明細帳』には神社拝殿は大正12年9月の大地震で全潰、13年11月に再建竣工と由緒追記がある。また昭和41年の修理碑が建つことから、いずれかの時に破碎瓦片が廃棄されたものと捉える。地業に瓦を使う例はあるが、調査区以外の地表にも瓦が散見しており、破片は外から持ち込んだものではなく、本殿の屋根に葺かれていたものと考えられる。

『埼玉のかわら』の『明治8年瓦生産者取調』による分布図では生産者は埼玉県東部（葛飾郡・埼玉郡）に集中している。9図1・7の東海式系文様瓦は、入山高地貝塚の他、時の鐘廻隅瓦（嘉永6（1853）年の棟札から鐘楼の改修が知られる）、黒谷貝塚土坑出土瓦（出土遺物の様相から19世紀後半～20世紀初頭に解体された建物の屋瓦とされる）、前述の長谷川家住宅旧店蔵にも同文瓦が認められる。瓦葺きは傷んだ瓦だけ差替え補修すれば総葺き替えせずに長期使用できる特性を持つ。大構出土瓦は編年観では18～19世紀と捉えられるが、葺かれていた時期などは確定できない。



第18図 瓦 (10) 参考資料

## 岩槻城大構

### <引用・参考文献>

- 今泉潔 1984 「「桧木棧瓦」の造瓦器具と製作技術」『物質文化』(42) 物質文化研究会
- 岩槻市 1981 『岩槻市史近世資料編Ⅲ 藩政史料』
- 岩槻市 1982 『岩槻市史近世資料編Ⅳ 地方史料』
- 岩槻市 1985 『岩槻市史通史編』
- 岩槻市教育委員会 1999 『平成10年度岩槻市内発掘調査報告書』
- 岩槻市教育委員会 2004 『岩槻状関連遺跡群発掘調査報告書3 岩槻城大構跡・諏訪小路武家地の調査』
- 加藤晃 1989 「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開－軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様の変遷－」『史学研究収録』14 國學院大學大学院日本史学大学院会
- 加藤晃 1990 「第六章 近世瓦の編年学的考察(Ⅰ)」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学文学部
- 加藤晃・金子智 1990 「第2章 御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』第3分冊 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書4 東京大学文学部
- 加藤晃 1992 「江戸瓦の変遷－加賀藩本郷邸出土の瓦について」『国学院雑誌』93-12
- 金子智 1994 「近世瓦の基本分類－江戸遺跡出土品を中心に－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第20冊哲学・史学編』
- 金子智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号 早稲田大学考古学会
- 金子智 1997 「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第43輯第4分冊
- 金子智 2003 「江戸における近世瓦の様相」『関西近世考古学研究』XI 関西近世考古学研究会
- 金子智 2013 「近世瓦の文様と装飾－江戸遺跡出土資料の分析から」『技術と交流の考古学』同成社
- ㈱四門 2016 『東京都新宿区 尾張徳川家下屋敷跡Ⅸ』学習院・㈱四門
- 埼玉県神社庁 1998 『埼玉の神社』
- 埼玉県立民俗文化センター1986 『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告書第4集
- さいたま市 2007 「神社明細帳」『さいたま市史料叢書』6
- さいたま市遺跡調査会 2013 『岩槻城三の丸武具蔵跡第5地点 (仮称) 人形会館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』さいたま市遺跡調査会報告書 第143集
- 杉本宏 2000 「棧瓦考」『考古学研究』第46巻第4号
- 第66回埋蔵文化財研究集会事務局 2017 『幕藩体制下の瓦-近世都市遺跡における生産と流通- 第66回埋蔵文化財研究集会 発表要旨・資料集』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張紀州藩上屋敷跡遺跡 IX』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第113集
- 名古屋市教育委員会 1994 『名古屋城三の丸遺跡 第4次・5次発掘調査-遺物編-』
- 山崎信二 2008 『近世瓦の研究 奈良文化財研究所学報 第78冊』
- 山崎信二 2012 『瓦が語る日本史 中世寺院から近世城郭まで』吉川弘文館
- 雄山閣 1972 『新編武蔵風土記稿』第十巻 大日本地誌大系⑩

## 第3節 まとめ

今回の調査により、愛宕神社の社殿南側には良好な状態で大構の土塁が保存されていることが確認された。堀に沿って構築された土塁は概ね北東から南西方向に延伸し、愛宕神社の社殿付近ではその土塁が東側へ突き出して構築されていることが確認された。また、現況では東側と西側の道路際はコンクリートの擁壁となっており、擁壁の際まで盛土がされているが、本来の土塁は神社の社殿西端付近までであったものと思われる。